

[46] パリの現代舞踊 この一年

～コンテンポラリーの低迷と創造～

1999年3月26日 東京新聞 夕刊

二月、パリはとても天気が悪かったが、こへきて晴れやかな陽射しになった。昨年四月、パリに着いた時と同じ空の色だ。

一年間、できるだけダンスを見て歩いた。パリ・オペラ座の情報は日本にいても入ってくるが、コンテンポラリーの分野はやはりその場にはいないと状況がつかめない。こちらにいればきっと刺激的な舞台に出会えるにちがいないと、宝の山に足を踏み入れるような気分でいたのだが、どうもその割には期待に応える程のものが無い。

舞台作りも雑だし、だいいち体のコントロールが利いていない動きが多すぎる。これなら日本の現代舞踊のほうがずっと上手い。あらためて、日本を見直してしまった。

私だけではない、フランスの人もそう思っているようなのだ。たとえば図書館の職員とか、写真屋さんの店員などが、世間話のついでに「八〇年代は夢中でダンスの公演に通ったものだけど、今はちっとも面白くない」と言う。どういうことだろう。

八〇年代、いわゆるヌーヴェル・ダンスが開始したころには、常識をくつがえすような

[46] パリの現代舞踊 この一年

～コンテンプラリーの低迷と創造～

1999年3月26日 東京新聞 夕刊

動きや表現が意表を突いて、いかにも新鮮に映ったにちがいない。痙攣的な動作や、ねじれた回転、直線的な造型は、それだけで刺激的だった。しかしそれも見慣れてしまえば何のことはない。いまでは場内がまだ明るいうちに、舞台上でダンサーが動いていても、観客は「また例によって…」という感じでろくに見もしない。ガールフレンドとキスするほうが忙しいのだ。

それにまた、ヌーヴェル・ダンスの影響で肩に力の入らない自然体の動きが多くなったために、テクニクとか修練の賜(たまもの)という装飾が少なくなった。人工的で不自然な動きは嫌味かもしれないが、さりとして誰にでもできるようないい加減なものでは、わざわざ劇場にでかけて行く意味もない。難しいところである。

同じことがおしゃれについても言える。昔のような手間暇かけた絶対的な「美人！」を見かけなくなった。今はさりげないナチュラル志向の世の中。御大家のお嬢様かパトロニ付きでなくては美人になれない時代は終わったのだ。いいことかもしれないが、お化粧っ

[46] パリの現代舞踊 この一年

～コンテンプラリーの低迷と創造～

1999年3月26日 東京新聞 夕刊

けもなしにリュックを背負った人ばかりだと街を歩いていても何だか物足りない。「花のパリ」から花が消えたと言いたくもなる。

とはいえ、街でハッと振り返りたくなる人がいないわけではない。同じくダンスも、この一年のあいだに心に焼き付く印象的な舞台が幾つかあった。

とびきり面白いと思ったのは、ジョゼ・モントアルボが演出、振り付けした公演。精度の高い映像を巧みに使って、生身のダンサーの動きと組み合わせ、奇想天外のイメージを生む。はじめはそうとわからなくて素朴に驚いたが、わかった後でも、その創意は新鮮だった。これからの舞台芸術で、映像の処理は大きな開拓領域にちがいない。

オリヴィア・グランヴィル振り付けの『暫定的スナップショット』も、タイトルはいい加減だが、才覚のほどは確かな作品だ。スクリーンと舞台上で同時に三つぐらいの「仕事」があって、観客の注意を拡散する。女のポーズを作る男。ポーズをつけながら、それとの対応がデュオになっていく。あるいは男同士

[46] パリの現代舞踊 この一年

～コンテンポラリーの低迷と創造～

1999年3月26日 東京新聞 夕刊

の組の動き。柔道のデモンストレーションのようだが、微妙にエロティックでもある。ストーリーもポエジーもなく、ただ身体とその動きに関する実践的考察があるのみ。それなのに、見ていると何かが深まっていく。

ダンサーとして天賦の資質が光って見えたのは、エラ・ファトゥミというまだ若い女性。型や技法を超えたところで、動きが人そのもの、存在そのものを表現している。

クリスティーン・バスタンの舞台は生々しい愛の残酷劇。舞踊というよりは身体演劇とでもいうべきものだが、しかしこれほどまでに心の傷口を描き出せるというのもヨーロッパ人ならではの。日本人には難しい。

日本の山海塾の『ひびき』が大きな喝采を浴びていた。パリで見ると日本的な質感が見事に際立つ。他のダンスとはまったく異質な境地にあるという迫力は鮮烈である。

それにしてもつくづく感じたのは、劇場が生活の一部になっているということ。中高年のカップルがラフなスタイルで芸術の空間・時間を楽しんでいる。それがじつにさまになっっているのだ。さすが、と思った。